夢の続きに

藤枝　なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の続きに

【Ｎコード】
Ｎ６９６７Ｙ

【作者名】
藤枝　なお

【あらすじ】
生まれつき体が弱く、母親を亡くしてからはさらにその症状は悪化していく。ベッドから起きられない日々の中で何度も同じ夢を見た。それは、一度も会ったことのない父親の姿。夢の中では辛い現実から逃げられる。そう思ったのに、あれ？これは夢？現実？目が覚めたら見たことのない部屋だった…。

第1話

お母さんが死んだ。

だけど、予想はしていた。年々弱っていくお母さんは、見ていて痛々しかった。だけど、お母さんは死ぬ間際まで笑っていた。そして、私にこう言った。

『辛いことがあっても、信じていれば…きっと叶う。あなたも、お父様にきっと会えるわ』

そして、笑って死んでいった。どうしてそこまで笑っていたれるのだろう。最後はベッドから起きられなくなっていたのに…。

お父さんは、その場に崩れ落ちて泣いていた。本当にお父さんはお母さんのことを愛していたんだ。

お母さんがベッドから起きられなくなってからは、お父さんも一緒に暮らしていたのだが、それまではお父さんは少し離れた家に1人で住んでいた。

お母さんは、身重の体でこの近くに倒れていたらしい。それをお父さんが見つけて、世話をした。そうして2人は次第に近い関係になっていったのだという。

お父さんは何度かお母さんに結婚を申し込んだのだけど、何故か結婚ということにはならなかったようだ。詳しくは教えてくれなかったのでわからない。

私がお父さんと呼んでいるのは、ただ自然とそう呼ぶようになったからなのだという。私のお父さん。でも、血は繋がっていないお父さん。私がそのことを知ったのは、物心がついてすぐの事だった。

お父さんは大好きだった。だけど、私の中の何かがこの人は本当のお父さんではないと言っていた。それをお母さんに聞いたら、お母さんは「あら、わかるのね」なんて笑っていた。そして、先程の事実を知ったのだ。

だけど、それでも私はお父さんとお母さんが大好きだったし、毎日楽しく過ごしていた。

ただ、お母さんが病気がちだったのに似たのだろう、私も小さい頃からよく体調を崩していた。それは成長するにつれて悪化していった。きっといつか私もお母さんのように衰弱して死んでいくのだろう。そう思うと怖くないわけではないが、お母さんのように笑顔で死ねればいいと思っている。

「そんなところにいると風邪を引く」

「お父さん…大丈夫よ」

お父さんは窓辺に座っていた私にひざ掛けをかけると、困ったような笑顔を浮かべて、仕事に行ってしまった。

お父さんは、お母さんが亡くなってからは仕事前と仕事の後に顔を見せる程度で、寝泊まりはしなくなった。

理由はなんとなくわかる。私がお母さんに似ているから。きっと、お父さんは私を見ながらお母さんを見ているのだろう。だからあんなに辛そうに私を見るんだ。お父さんの、お母さんに対する愛情が

感じられる。ただその一方で私の存在がなくなっていくようだった。

「っつ…！」

突如、激しい耳鳴りと頭痛に襲われる。最近よくあるのがこの耳鳴りと頭痛なのだ。その度に、微かに話し声と、耳障りなノイズのような音が聞こえてくる。いよいよ幻聴が聞こえるようになったのかもしれない。

「アリア！」
「ア、ラン…」

駆けつけてくれたのは、向かいのお店で薬局をやっている2歳年上の幼馴染だ。彼は小さい頃から私の面倒をよく見てくれた。優しく、時に厳しく見守ってくれた人だ。

「大丈夫か、とにかくベッドに行こう」

うまく歩けない私を軽々と抱き上げて、アランは私をベッドまで運んでくれた。そして、痛みが治まって眠りにつくまで手を握ってくれていた。

今は、お父さんよりもアランと一緒にいる時の方が安心する。腫れ物に触るようなお父さん。このまま一緒にいてもお父さんがおかしくなってしまう。だから、本当は私が離れた方がいいのだ。だけど、この調子ではそうもいかない。

アランにも、いつも迷惑をかけてしまっている。これではいけないと思ってはいる。だけど、どこかでアランに頼っている私もいる。このままではいけないのに。

夕方、目が覚めるとアランの姿はなく、代わりに手紙が置いてあった。『夕方また来る』と一言だけの手紙でも、私の心を温かくしてくれた。

そして、その言葉通りいくらもしないうちにアランが来てくれた。手にはたくさんの薬草や薬。相変わらずだ。

「体はどうだ？」
「まだ頭は痛いかも…」
「そうか、何か食えるか？」
「欲しくない」

ここ数日、私は食べ物を受け付けない。食べても吐いてしまうのだ。そのためここ数日でかなり痩せた。いや、やつれたという方が正しい。

と、またあの頭痛だ。今度は今までにないくらいの痛みが私を襲う。

「おい、アリア！しっかりしろ！」

痙攣を起こしている私を、アランが呼び戻そうと必死に呼びかける。それでも、この激しい痛みに私は意識を失いかけた。その時、

アランが私をきつく抱きしめた。

「ダメだ！戻って来い！」

その言葉に、意識を失いかけた私だったが、どうにか遅い来る痛みの波に耐えることができた。

「よかった…」

「アラン…ありが…」

私の言葉も聞かず、アランは再び私の体を抱き寄せる。そして震えながら耳元で言った。

「アリア、よかった…」

「アラン…」

アランはしばらく抱きしめた後、私の目を真っ直ぐに見つめる。いつものアランではない様子に、私も緊張しながら見つめた。

「アリア。俺と結婚しよう」

「…アラン…？」

告白を通り越したプロポーズに、私は文字通り目を丸くしてしまった。

「いや、ごめん。気が早いよな。でも、俺はアリアが好きだ。守りたいんだ…！」

返す言葉がなかった。私の心の奥に秘めた想い。アランが好きだという気持ち。まさかアランも同じ気持ちを持っているとは思わな

かった。

だけど、アランにこんな重荷を背負わせてはいけない。もう永くないのは分かっているのだから、悲しむ人を増やしてはいけない。

「ダメ…」

「アリアが断る理由は、俺が嫌いだからじゃないよね」

「え…」

「アリアの事だ。どうせ心配かけたくないとか言う理由だろう。それは受け付けない。結婚はまだ早いと思うけど…でも、俺の気持ち、知っておいて」

そう言うと、アランは照れ臭そうにして食事を作りにキッチンに行ってしまった。

その後ろ姿が、とても愛おしく思えた。アランのことを考えるとアランの気持ちを受け入れてはいけない。だけど私は気持ちを止められなかった。

歓喜と少しの罪悪感を抱えながら、その日は眠りについた。

第2話

翌日はよく晴れていて、久しぶりに温かな日差しが降り注いだ。こんな日は外に出たくなってしまうが、お父さんからもアランからも大反対されてしまった。

昨日、仕事を終えたお父さんにアランが私とのことを話した。意を決して打ち明けたんだけど、意外にもお父さんは驚かなかった。

お父さんは一言、『アリアをよろしく』とだけ言った。まるで自分の役目は終わったと言わんばかりに。

もしかして、翌日からは来てくれないのではないかと思って心配したのだけれど、ちゃんと来てくれた。やっぱり血は繋がっていなくても、お父さんはお父さんなんだと思った。

「ねぇ、本当にダメ？」
「外？」
「うん」
「どうしても出たい？」
「うん！」

もしかして！と思って期待していたら、アランは私の額に手を当てて、そして一言。

「ダメ」

今日は熱の方か…。私でさえ気が付かなかったのに、どうしてアランには分かってしまうんだろう。

消化に良い食事と、アランの家からもらった薬を飲み、ソファに腰かける。調子のいい時は窓の外を眺めながら、ソファに座って編み物をするのだ。

小さい頃から外に出られなかった私は、編み物ばかりしていた。お母さんに教えてもらった編み物は、今ではかなりの腕前になっている。

お母さんも外に出られない分、編み物や縫い物をして、生計を立てていた。私もそれに倣って、編み物をして、それを売っていた。もちろん売りに行くのはお父さんだったんだけど。でも自分の作ったものが売れるというのはすごく嬉しくて、なんだか少し大人になった気がした。

そういえば、今日はあのノイズみたいな音や変な声は聞こえない。私の体調と何か関係があるのだろうか。

「やっぱり耳鳴りと幻聴かな…」

そう考えると全てが解決するのだから。でも、単なる耳鳴りと幻聴では納得がいかない。何が納得いかないのか自分でもよくわからないのだけど、何かが違うのだ。どこか胸騒ぎがするというか、何かを待っているような…。

待っている…そう、私は何かを待っている。何を待っているの？自分の事なのに分からない。そんな感覚がここ数日は強くなっている。いつからかと問われれば、間違いなく、お母さんが亡くなってからだろう。

もしかして、お母さんが呼んでいるの？とも思ったが、なんとなく違う気がする。お母さんは私を向こうに呼んだりしない。

「怖い顔して何考えてるの？」

「アラン…。なんでもないの、ただちょっと疲れちゃったかな」

「朝からずっと編んでるもんな。そのマフラーどこまで伸ばすんだ？」

「え、きゃっ！」

言われて手に持っているマフラーを見ると、３m近くの長さになっていた。あぁ、もったいないけど、適当な長さにまでほどく。

次は何を作ろうか。お母さんが大好きだった、ポンチョでも作ろうか。よく自分の作ったポンチョを着て、編み物をしていたお母さん。前のは古くなったから、最後に着ていたのは私が作ったものだった。

タンスの奥からそれを取り出して着てみた。お母さんの香りがする。少しだけ体が楽になった気がした。アランがお店に戻ると、私はまた編み物に没頭した。

かなりの時間集中していたようで、ふと気が付くと辺りは暗くなり、ポンチョを含めて帽子や靴下など大量にできていた。少しやりすぎたかもしれない。だが、体の調子が良い時に作っておかないと、間に合わないのが実態だ。

「ジゼル…？」

「あ、お父さん。お帰りなさい」

「あ…ただいま。アリア、その上着は…」

お父さんは私の着ていたポンチョを指差して言った。

「お母さんのよ。これを着たらなんだか体が楽になった気がして」

「そうか…。今日は調子が良さそうでよかった。私はもう帰るよ」

「え、もう？」

「あぁ。おやすみ」

「おやすみなさい…」

それから、お父さんはあまり家に足を運ばなくなった。それでも一日1回は顔を出してくれるが、それも短時間になってしまった。

アランに相談して、お父さんに聞いてもらっても、ただ「忙しい」や「風邪をうつしてはいけないから」というばかり。

「私、何か嫌われるようなことをしちゃったのかな？」

「そんなことないだろ。心配されたくなくて来れないんだよ」

アランはそう言って励ましてくれるが、私はどうも嫌な予感がしていた。そして、それは当たってしまったのだった。

あの日から1か月。もう外は真っ白な雪景色だ。最近ではお父さんは顔も出してくれなくなった。

心を痛めていると、アランがバタバタと走って私の部屋に入って

来た。

「どうしたの？そんなに急いで」

「どうもこうも！これ！」

アランが差し出したのは一通の手紙だった。差出人はお父さん、そして宛名は私だった。

「今玄関でこれを見つけたんだ」

恐る恐る封を開けると、そこには見慣れた文字でびっしりと文字が書かれていた。お母さんと出会った時の事、私が生まれた時の事、私の成長していく過程など、事細かに書かれていた。お父さんが自分の子どもではない私を愛情もって育ててくれたことがよくわかる文面だった。

手紙の最後には、こう書かれていた。

『私はジゼルを心から愛していた。それ故に、ジゼルが死んでからは、日に日にジゼルに似ていくお前を見ていられなくなってしまった。本当にすまない。アラン君と幸せに・・・』

それを読んで、私はショックよりも、「あぁ、やっぱりな」という思いの方が強かった。あのお父さんの表情は、私に対する愛情よりも、戸惑いの方が強かったのだから。

手紙を読んだアランは酷く憤慨したが、私はこれでよかったと思った。お父さんのためにも、私のためにも。

ただ、一つ残念なのは、お父さんも私の本当の父親について何も

知らなかったということだ。お母さんが私に教えてくれなくても、もしかしてお父さんは知っているかもしれないと思っていたから。

だけど、お母さんはお父さんに何も話さなかったという。ただ、一度だけ口を開いたのは、お母さんがお父さんと出会ったその日に発した言葉だけだった。

『愛した人の子どもと一緒なら、大丈夫』

私はお父さんの手紙で、このことを初めて知った。そして、お父さんの手紙の中の言葉を思い出した。

『私はジゼルを愛していたが、ジゼルが私に対して抱いていた感情は、家族に対する愛情と一緒だった。ジゼルが心の底から愛したのは、アリアの父親だけだったのだろう』

だからお母さんは自分の体調が悪化するまで、お父さんと一緒に暮らすことを拒んだのだ。だから結婚を申し込まれても頑なに断ったのだ。

疑問が一つずつ解消されていく中で、私の中のある想いが強くなっていった。

『本当のお父さんに会いたい』

お母さんが最後まで愛し続けた人。どうしても会いたい。

第3話

お父さんが姿を消してから、私の体調はどんどん悪化した。アランが言うには精神的な要因もあるとのことなのだけれど、それにしても酷かった。

しばらくはベッドから起き上がれない日々が続いたし、そんな私を献身的に看病してくれるアランにも疲労の色が見て取れた。

こんな時、お父さんがいてくれたら…。目を閉じると浮かんでくるのは姿を消したお父さんの姿と、まだ見ぬ本当のお父さん。

どんな人なのだろうか。私と似ているのだろうか。何をしているのだろうか。どこに住んでいるのだろうか。そして、私のことを知っているのだろうか。

この頃から熱でうなされていると、知らないはずの本当のお父さんの声が聞こえてくることが多々あった。それも以前よりも鮮明だ。単なる夢だと分かっているのだけれども、夢の中で私は『お父様』と嬉しそうに笑っていた。

そうか、本当のお父さんは『お父様』って呼ばれているのね。大きな背中に私と同じ金色の髪の毛、顎の髭がダンディだわ…。

１６歳にもなって、お父様の膝の上に座って楽しく話をしている夢を見るなんて…。目が覚めてからいつも恥ずかしくなってしまう。だけど、どこか嬉しい。本当に金髪で、髭があるなんてわからないのに。

『アリア』

そう呼ぶ声が懐かしいと思うのは、きっと私の願望だからなのだろう。

ベッドから動けない私の楽しみは、編み物からこの夢の中でのお父様との触れ合いに代わった。

『アリアは何が好きなんだ?』
『私は編み物が好きなの。この前はポンチョを編んだのよ』
『ジゼルに似たのだな。ジゼルもよく編んでいた』

夢の中で、お父様は優しく頭を撫でながら言った。相変わらず顔は何故か見えないが、それでも私に流れる血が、この人が父親だと言っていた。

『お父様、どうして私はお父様のお顔を見れないの?』
『…すまない。もう少し待ってくれ。そうしたらきっと迎えに行くから』
『絶対?』
『もちろんだ』
『わかったわ。約束ね』

小さい子みたいに指切りげんまんをして、お父様に抱きついた。

だけど、その体はどんどん薄くなっていく。今日はここまでのようだ。

「アリア…！」

目を開けると、アランが心配そうに私を覗き込んでいた。

「どうしたの？そんな顔をして」

「いや…寝言を言っていたから…」

「寝言…きゃっ！」

アランは私が起き上がるなり私をきつく抱きしめた。

「どうしたの、苦しっ…」

「行くな」

アランは顔を上げることなく言った。

「どこにも行くな！行っちゃダメなんだ…！」

「アラン…」

私は、彼のその言葉に何も返すことができなかった。

「お前が、本当の父親に会いたがっていることは分かっている。だ

けど、俺は…」

そこまで言って、アランは言葉を詰まらせた。きっと心優しいアランのことだ。これ以上は言ってはいけないと思ったのかもしれない。でも、その気持ちは痛いほど伝わった。

「アラン…」

私はアランを束縛してはいけない。まして、もう永くはないのだから。

「私、アランの事が好きよ」

だからこそ、アランには幸せになってもらいたいのだ。

「だから、もうここへ来てはダメ」

それが1番なのだ。誰にでも優しくて、気が利いて、頼れるアラン。町の人からの人望も厚い。そんな彼を私が独り占めしてはいけない。

「嫌だ。それだけはアリアの願いでも聞けない」
「でも、このままじゃアランのためにならない…」
「俺のためになるかならないかは俺が決める。今日は帰るよ。明日…また来る」

私の反論を受け付けることなく、アランは帰って行った。

最近、私は思うのだ。アランは私を好きだと言ってくれているけれど、それは責任感から来るものではないのかと。また、お母さん

がお父さんに対する情が家族への愛情だったように、私に対する愛情は、家族に対するそれなのではないかと。

それが私の不安や罪悪感からそう思うのかもしれないが、本当に彼が私のことを好いてくれているのであれどうであれ、私と一緒にいてもこの先の未来はないのだ。だったら、早く心の優しい彼を解放してあげたいのに。

「どうしたらいいんだろうね…」

『どうした？元気がないな』

『うん…実はね…』

また同じ夢の中で、私はお父様にアランのことを相談していた。これまで、私の体調がずっとすぐれないことは言っていなかったので、お父様はとても心配してくれた。

『いつから体調が悪いんだ？』

『昔から…。それでも小さい頃は外で遊べたのよ。だけど、最近はベッドから出られないの』

『そうか。その青年…アラン君と言ったか。彼もアリアのことを好いてくれているんだな…時間がないか…』

『え？』

『いや、何でもない』

お父様の最後の言葉は聞き取れなかったが、アランのことを話したら、どちらの気持ちも分かると言って、一緒に悩んでくれた。それだけで、私の気持ちは少し軽くなった。

『お父様…私、早く死んでしまいたい…』

『何を言い出すんだ』

『だって、もう歩くことすらままならないし、このままだとアランまで倒れちゃうし…お母様のところに行きたい…』

『そんなことを言ってはいけない。…お前の体はやはりそちらの水に合わないのだな』

今度はお父様の呟きも聞き取れた。

『やはりって…』

『お前の体はそちらの水によって徐々に蝕まれていっている。ジゼルがそうであったように…。今日話を聞いていたがもう限界だな。ようやく見つけたんだ。手遅れになる前にお前をこちらに連れ戻す』

『え、ちょっと待って！言っている意味が分からないわ！』

いきなり水が合わないだとか、蝕まれているだとか、果ては連れ戻すだとか…！そもそもお父様はどこにいるの？第一これって夢じゃないの？

「意味わかんない！」

飛び起きた私の体は、既に黄金の光に包まれていた。そして、光の中心から出てきた腕に、体ごと引きずり込まれた。

第４話（ルイ）

俺はこの１６年間、一つの事しかやっていない。仮にも王の側近中の側近、シルヴァン様に仕える身でありながら、主を放っておいてこんなにも長い間研究に没頭することになろうとは。

その研究というのも我が主の最愛の人を探すための研究だ。シルヴァン様の奥方様はジゼル様と言って、それはお美しい方だった。だけどどこか抜けていて、目が離せなくて手がかかる…いやいや、楽しませてくれる方だった。

シルヴァン様の溺愛ぶりも王宮内では名物だった。王をも一目置いている国内Ｎｏ．２の実力者、鬼のシルヴァン＝ベクラールが、ジゼル様の前では人が変わったように優しい眼差しになるのだから。

それもジゼル様が身籠ってからは一段と溺愛ぶりが増した。他の男は目を合わせただけで氷のような視線を浴び、話しただけで射殺すような視線を浴び、下心など少しでも出そうものなら鬼の制裁が待っているのだ。

ジゼル様はそんな様子をただ笑って、毎日楽しそうにして見ておられた。お腹が大きくなればなるほど、シルヴァン様の過保護っぷりは加速したが、ジゼル様はそんなことお構いなしに、街や森に遊びに出かけられた。当時１４歳の俺は、２３歳のジゼル様に振り回されっぱなし。そんな時に、事故が起こったのだ。

『捕まえろ！』

ジゼル様のお供で街に出た時だった。丁度王宮に仕える魔術師た

ちが誰かを追っている様だった。

『ジゼル様、私の傍から離れないで…って！いない！』

ジゼル様は王宮で魔術師をしておられた。だから、魔力はかなり高く、無茶もかなりするお方だった。それをわかっていたはずだったのに。

『見てー！ルイ！捕まえたわよ！』

『おやめください！もしものことがあったらどうするんですか！』

もうすぐ臨月だというのに、ジゼル様は全く分かっておられない。それに、俺には分かる。ジゼル様の魔力はここのところ安定していない。おそらく、お腹の中のお子様の影響もあるのだろう。だからこそ、俺がジゼル様についているのだ。

『ルイ、ごめんなさ…』

『ジゼル様っ！』

逃走者を捕まえて意気揚々と俺の元に戻ってくるジゼル様。その途中、突如として異界渡りの術が発動してしまった。

『きゃあぁぁぁっ！』

『ジゼル様―っ！』

ジゼル様はワープホールに飲みこまれてしまったのだ。異界渡りの術はとても高度な術で、かなり高位の魔術師にしかできない。それに、発動した者でもどこに飛ぶかはわからないという何ともいい加減な術なのだ。

ふと見ると、ジゼル様が捕まえたという逃走者が、取り押さえられながらにやりと笑った。その時俺は全てを悟った。この男が…！

いつものジゼル様なら跳ね返せた程度であっただろう。しかし、身重の体には無理だった。俺は項垂れた。どう報告すればよいのか…。

最愛のお方を失ったシルヴァン様など、想像しただけで恐ろしい。しかし、この重大事件を報告しないわけにもいかず、俺は王宮へと急いだ。

しかし、シルヴァン様はもうすべてを知っておられた。聞けばジゼル様がいつもつけておられたペンダントはシルヴァン様のプレゼントで、それには遠視の魔術がかけられていたのだそうだ。

ジゼル様が異界渡りに飲みこまれた直後、シルヴァン様は会議中にもかかわらず遠視の魔法を使い、ジゼル様の状況を確認した。その瞬間に同席した者たちは、みな一様にシルヴァン様の怒りと悲しみに充てられて気を失ったという。

『ルイ』
『はい…』
『お前の魔力を見込んで頼みがある』

命令ではない、シルヴァン様の『頼み』。逆に恐ろしい。

『本日よりジゼルと娘、アリアを連れ戻すための研究をしてほしい』
『は、はい…』
『何年かかってもよい。今からだ』
『わかりましたっ！』

もう生まれてくる子どもの名前まで決まっていたのか…。俺の魔術師人生をかけて、必ずこの研究は成功させる。いや、させなければならない。

そう思って１６年間やってきた。

研究を初めてみて、初めて分かったこと。それは異界渡りの術がいかにいい加減かということだ。特に術を使った男が既に処刑されているために、どの辺りかも想像がつかない。

そもそも異界など数えきれないくらい存在しているのだから、そこから手がかりを探すのだって手間がかかる。

俺は微かなジゼル様の力を追って、いろいろな場所を探した。ある世界はまだ石器を使っていたり、ある世界は高い建物や動く金属に人が乗っていたりと、これまで１０００以上の異界を見てきた。見るだけならそう難しくはない。

そして、探し始めてから１６年目、ようやくお２人がいる世界を見つけたのだ。私たちの世界と似てはいるが、魔術が存在しない世界のようだ。

ジゼル様が日に日に弱っているのは、私たちにもわかった。それもそのはず。私たちは命の源である魔力を持続させるために神霊山から湧き出る魔水を食事に利用している。それを飲まないと、体の魔力が上手く浄化されず、自分の体を侵食してしまうのだ。

１日２日飲まなくても支障はない。飲まずに生命を維持できるのは、魔力の強さにもよるが、１０年前後だ。ジゼル様は１６年経っ

ている。もう歩くことすらままならない。

『今すぐ連れ戻せないのか！』

『正確な場所が分からないことには…あと3カ月は…』

『くそっ…』

そうこうしている間に、ジゼル様は息を引き取ってしまわれた。あの時のシルヴァン様のお姿は見ていられなかった。そして、俺も自分の無力さを感じた。

だけど、こうしてシルヴァン様が自分を保っていられたのも、アリア様がいらっしゃったからだと思う。

あれから、俺はどうにかアリア様の夢に繋げることができないかと模索した。夢渡りなら異界であってもできるのではないだろうか。

それを提案したらさすがシルヴァン様だ。数日のうちにやってのけた。そして、アリア様との初めての会話を成し遂げたのだった。

実は初めのうちは俺も同席して2人で夢渡りをしていたのだが、どうやら2人だとノイズが入ってしまう上、アリア様の体にも負担になるようなので、改良を加えて1人でやることになったのだ。

もう何回目かになる夢渡りを終えたシルヴァン様は、目を覚ますなりこう言った。

『もう用意はできているな。これから、アリアをこちらに連れ戻す』

『これからですか！？』

『もう1秒たりとも待っておれん！アリアも限界だ。すぐに準備をしろ』

『はい！』

アリア様も１６歳。いくらシルヴァン様とジゼル様のお子様で魔力は強いといえど、１６年も、しかも生まれてから一度も魔水を口にしていないとなると限界が来てもおかしくはない。

今度こそ。今度こそ俺はシルヴァン様とアリア様、そしてジゼル様のために…！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6967y/

夢の続きに

2011年11月22日05時15分発行